

梅吉殺し

野村胡堂

一

「親分、お願いだ。ちよいとお御輿みこしを上げて下さい」

八五郎のガラツ八は額際に平掌ひらてを泳がせながら入って来ました。

「何を拝んでいるんだ、お御輿は明神様のお祭りが来なきや上らねえよ」

銭形の平次はおどろく色ありません。裏長屋の狭い庭越しに、

梅から桜へ移り行く春の風物を眺めて、ただ斯うぼんやりと日を暮している、この頃の平次だったので。

「三河町の殺しの現場へ行つて見ましたがね、何しろ若い女が四人も五人もいて、銘々勝手なことを言うから、何時までせせつて居たつて、眼鼻は明きませんよ」

ガラツ八は頸筋くびすじを搔いたり、顔中をブルンブルンと撫で廻したり、仕方たくさんに探索の容易ならぬことを吞込ませようとするのです。

「八は男つ振りが良過ぎるからだよ。岡っ引は醜男ぶおとこに限るつてね」
「それでもありませんがね。何しろ右から左から、胸倉まで搦ん

であつしを物蔭へ引張って行つて自分の都合の宜いことばかり
言うんでしよう」

「宜い加減にしないかよ、馬鹿だなア」

「へエ——」

「惚気のろけなんか聴いてるんじゃない。サア、案内しな」

「へエ——」

「せつかくお前の手柄にさせようと思つてやったのに、仕様のな
い奴じゃないか」

平次は小言をいいながらも、手早く身仕度をして、ガラツ八と
いっしょに外へ出ました。

まだ三十前と言つても、平次とあまり年の違わない八五郎に、一と廉筋かどの立った手柄をさせて、八丁堀の旦那方に顔をよくした上、手頃な女房でも持たせて、一本立ちの岡っ引にしてやろうと言つた平次の望みが、何時もこう言つた愚ぐにもつかぬ支障でフイになつてしまふのです。

平次は途々八五郎の説明を聴きました。

「三河町の奈良屋三郎兵衛つていうと、親分も知つている通り、公儀の御用を勤めるたいそんな材木屋だが——金に不自由がなくなると、人間はどうしても放埒ほうらつになるんだね。お蔭様でこちと

らは——」

「無駄を言うな、奈良屋三郎兵衛の放埒がどうしたというのだ」

「放埒は伴の幾太郎の方ですよ。二十六にもなるが、遊びが好きで可愛らしい許嫁があるのに祝言もせずはまだ独り者だ。あんまり羽目を外して、親父の大事なものまで持出し、とうとう座敷牢のように拵こさえた嚴重な囲いの中に打ち込まれていたが、ゆうべその囲いの中で脇差で突っ殺された者があるんで」

「フーム、変った殺しだな」

「ところが、変っているのはその先なんで、囲いの中で殺されていたのは、伴の幾太郎と思いきや」

「思いきやと来たね、お前いつからそんな学者になったんだ」

「へッ、学者はあつしの地ですよ」

「無筆は鍍金めっきだったのか、そいつは知らなかった」

「からかつちやいけません。とにかく、けさ囲いの中で、人間が殺されているのを見付けたのは下女のお仲、二十五六のこいつは良い年増ですよ」

「無駄が多いね、早く筋を通しな」

「下女のきりょうも筋のうちですよ。ともかく、大騒動になって、血だらけな死骸を引起して見るとそれが、伴の幾太郎と思いきや

——てんで」

「また思いきやか。お前の学はよく解ったよ、先を申上げな」

「手代分で店の方をやっている従兄いとこの梅吉という男が囲いの中で殺されて、伴の幾太郎は影も形もない」

「フーム」

「驚くでしょう、こいつは。あつしのところへ知らせて来たのは、まだ夜が明けたばかりの時だ。親分へ伝言ことづてをやって、叔母さんに朝のお菜さいを頼んで飛んで行って見ると——」

「合の手が多過ぎるよ、叔母さんなんか引っ込めて話を運びな」
平次も少しジレ込みました。ガラツ八の話術で展開する筋は、なかなか面白そうです。

「若い女が多勢めいめいいて、銘々自分だけ良い子になろうと弁じ立てる

から、手の付けようがねえ。親分の前だが、女は苦手だね」

「何をつまらねエ、向うでもそう言っているよ、岡っ引は苦手だ——とね」

「へッ、違えねえ」

「ところで、俵の行方はそれつきり知れずか」

平次は少し真面目になりました。

「皆目解らねえ」

「囲いの戸は開いていたのか」

「大一番の海老錠えびじょうがおりていたそうですよ」

「鍵は？」

「旦那の三郎兵衛が持っていた筈だが、それは表向きで、懲しめこらのための窮命きゆうめいだから、鍵はツイ廊下の柱にブラ下げてあるそうですよ」

「その鍵はあるだろうな」

「ないから不思議で」

「成程そいつは面白そうだ」

「だから親分を誘さそい出しに来たんですよ」

「恩に着せる気なら俺は帰えるぜ」

「あつ、あやまった。親分、せつかく此処まで来たんだから、ま
ずチヨイト覗いてやって下さい。若い女が五六人いて銘々良い子

になる気だから、そりや賑やかな殺しですよ」

「賑やかな殺し——てえ奴があるかい」

そんな事を言いながら、平次は八五郎の導くまみちびまに、奈良屋三

郎兵衛の豪勢な店先に立っておりました。

二

奈良屋三郎兵衛は五十五六、江戸の大町人で、苗字みょうじ帯刀を許さ
れているというにしては、好々爺こうこうやという感じのする仁体でした。

「銭形の親分か、御苦労様」

鷹揚おうえうにうなずくと、頬のあたりに淀よどんだ持前の愛嬌が、戸迷いをしたようにスーツと消えます。

「飛んだことでしたね。——ところで、殺された甥御おいごの梅吉さんとかが、何んだって囲いの中へ入っていたんでしょ」

平次はさっそく事務的な調子になります。

「さア、そいつはこの私にも解らない」

「若旦那の幾太郎さんは、何処へ行きなすったんでしょ」

「気の毒だが、そいつも私には解らない。そんな事は奉公人達が思いの外知っているものだが——親分の前でそんな指図がましい事を言うのも変だね」

こんどは三郎兵衛の頬に、本当の微笑が浮びました。大町人らしい柔かい風格です。

「それじゃ囲いの中を見せて貰いましょうか」

平次はガラツ八に眼で合図して、番頭の佐助に案内されて奥の方に通りました。番頭の佐助は六十を四つ五つ越したらしい、顔然たる老人で、腰の曲った、皺だらけな、——一生を帳場格子の中で暮して、算盤そろばん以外の事は、あまり興味を持っていないと言つた人柄でした。

「此処でございますよ、親分」

佐助が指したのは、店から奥へ通う廊下の中程から、少しばかり

り右へ入った土蔵の庇合ひさしあいで、そこへ急造したらしい、縁側付の六畳ほどの部屋が、初夏の明るい陽に、まざまざと照らされています。

さすがに牢格子ろうごうしにはめませんが、出入口は人見を付けた嚴重な檜かしの一枚戸で、平常ふだんは大海老錠おおえびじょうで鎖とぎしてあるらしく、戸の上の欄らん間のま荒い格子から入る明りが、真新しい畳の上に落ちて、血潮の中に男が一人俯向きに倒れているのが、浅ましくも見通しになるのでした。

「何だつて若旦那をそんなところへ入れることになったんだ」
平次はそれが詳くわしく訊きたい様子でした。

「よくあることですが、許嫁のお桃ももさんというのがあるのに、お艶とか言う恐ろしい女に引っ掛りましてね」

佐助は言つて宜いか悪いか解らないらしく、恐ろしくおどおどした調子でこう言うのでした。

「そんな事で、座敷牢は少し乱暴じゃないかね」

「へエ、でも、店の大事な品を持出したり、小言を言う親旦那に喰つてかかったりしますので、懲こらしめのために、こんなところに入つて頂くことになりました。親類方御相談の上でなすつたことで私風情ではどうにもなりません」

佐助は臆病おくびょうらしく揉手をしながら、考え考え三郎兵衛のために

弁ずるのです。

「そのお艶というのは何処にいるんだ」

「それがよく解りません」

「八、すぐ行つて見てくれ。幾太郎はその女のところに居るに違
いあるまい」

平次はガラツ八の方を振り返つて無造作にこう言うのです。

「へエ——」

「変な顔をするなよ。——お艶の家が判らないつて言うんだらう。

馬鹿だなア、——先刻旦那がそう言ったじゃないか、そんなことは奉公人が知っているものだ——とね」

「なア——る」

「間違いがあつちやならねえ。飛んで行くんだぜ」

「合点ツ——だがね、一つだけ言つて置き度^てえことがあるんだが」

「何だい、早く申上げて了^{しま}いな」

「今朝この囲いの中で、女物の櫛^{くし}を拾いましたよ」

「何処にあるんだ」

「これですよ、あつしが拾つたんで」

八五郎は懷紙に包んだ黄楊^{つげ}の梳^すき櫛^{くし}を一つ、平次の手に載^のせました。

「何だ、早くそう言や宜いのに。こんなものを温めておく奴があ

るもんか」

「それからもう一つ」

「文句の多い野郎だな」

「あ、あ、あ、しが親分を迎いに行っている間に、お神楽かぐらの清吉が来て、さんざんかき廻して行ったそうですよ」

「そんな事はどうだって宜いじゃないか」

「へエ——」

ガラッ八が飛び出すと、平次は困いの中へ入って行きました。

六畳の半分をひたす血の海の中に俯向きになっている梅吉の死骸を引起して見ると、二十七八の小肥りの男で、脇差で横から

首筋を縫われ、そのまま前へのめつたらしく、急所の深傷ふかでに、声も立てずに死んだ様子です。脇差は拭きもせず放つてあるところを見ると、下手人が臆病で物馴れない様子もよく判ります。

「見付けたのは？」

「下女のお仲と申す者で」

「呼んで貰おうか」

「お仲、——そこに居るなら出て来るが宜い。呼ばれてから、あわてて引っ込むやつがあるものか」

「へエ——」

佐助に叱られて、恐る恐る出て来たのは、二十四五の、ちよつ

と良い年増でした。

「けさ死骸を見付けた時の様子を、詳しく話して見るが宜い」
平次は穩かな調子で引出しにかかりました。

おだや

「雨戸を開けて、ヒョイと覗くと、——中は一パイの血で、梅吉
どんが殺されているんです」

「さいしょから梅吉と判ったのか」

「いえ、初めは若旦那だと思ひました。大きな声を出すと、皆んな飛んで来て、鍵が見えないのでコジ開けて入って、死骸を引起して初めて梅吉どんと判りました」

お仲の話はなかなか確りしております。

「この櫛くしは誰のだか知ってるかい」

「――」

お仲は一文字に口を結んでしまいました。

「言いたくないと見えるね。まさかお前のじゃあるまいな」

「飛んでもない、親分さん」

お仲はあわてて打ち消しました。

三

奉公人たちの説明で夜中人に知られずに、この囲いの前へ来ら

れるのは、主人の三郎兵衛と、女房のお篠しのと、老番頭の佐助と、殺された梅吉と、幾太郎の妹のお栄と、幾太郎の許嫁のお桃と、下女のお仲だけと判りました。

あとは五六人の若い奉公人だけ。それは嚴重に仕切られた別棟べつむねの方に寝るので、奉公人仲間知られずに、ここへ来る工夫はなかつたのです。次に平次が逢つたのは、幾太郎の妹で、主人三郎兵衛の娘のお栄でした。せいぜい十七八、まだ小娘と言って宜いほどの柄がらですが、それがまた恐ろしいおしゃべりで、さすがの平次も受太刀になる有様、ガラッ八が逃げ出したのも無理はないよ
うな気がします。

「親分、何んでも訊いて下さい。私の知っていることは、皆んな言ってしまったますよ、——兄さんの事ですって？　兄さんが困いなんかに入れた事でしょう。え、判りますわ。少しばかり物を持出したり、お父さんにちよつと楯たてをついたくらいのこと、座敷牢のようなどころに入れられたと聞いたら、世間様はそりや不思議に思いますよ。それも、これも、皆んなワケのあることなのですよ。え、私の口からは言われないけれど——」

と言った調子、こんなのに引つ掛つていると、要領を得ないうちに、うけ合い日が暮れてしまいます。きりようも満更でないのが、何だつて馬鹿馬鹿しく強韌きょうじんな舌を持つて生れたことだろうと、

平次は氣の毒にさえなるのでした。

次に逢ったのは、三郎兵衛の後添いのお篠、これが奈良屋の内儀かしらと最初は平次も驚いたほどです。三郎兵衛は五十七八とすれば、どうしても二十五六も年齢としが違うでしょう。せいぜい三十一二、どうかしたら、もう二つ三つ上かも知れませんが、非凡の美しさは年齢を超越して、ひよつと見ると、二十五六としか見えません。

「御苦勞様でございます」

お篠は慇懃いんぎんに挨拶しました。お茶や礼式たしなの嗜みたしながありそうで、何となく御守殿風ごしゅでんが匂います。

「御新造さんは、お屋敷奉公をしたことがあるんでしょような」
平次の問いは少し無作法で唐突でした。

「え」

お篠は心持鼻白みます。

「それじゃ、ヤットウの方の心得もあるんでしょようね」

「いえ、——ほんの少しなぎなた長刀を仕込まれましたけれど」

お篠は本当に消えも入りたいた姿でした。青々とした眉の跡、頬の美しい曲線、襟元の涼しさ、——平次もこんな女は、舞台でしか見たことのないような心持がするのです。

「この櫛くしは誰のでしょう」

平次の掌の上には、半分紙につつんだ黄楊つげの櫛がありました。

「私のですが――」

何という穏やかな調子でしょう。

「この櫛が、死骸の側にあつたのですよ、御新造」

「まア」

「囲いの中へ入らなかつたんでしような」

平次もツイ、この当惑した美女のために、助け舟を出してやる気になりました。

「入れる筈もございません。幾太郎さんは大變私をにくんでおりました」

「するとこの中へ入るのは？」

「お仲と、お栄だけでございます」

「この櫛はふだん何処においてあるんです」

「ツイ隣の納戸なんどの鏡台の上においてあります」

「持って歩くような事はないでしょうな」

「梳すき櫛すですもの」

大きな黄楊っげの梳すき櫛すを、大家の内儀が髪に差して歩く筈もあり
ません。

「この家の中に御新造さんを怨んでいる者はありませんか」

「飛んでもない」

お篠は脅おびえたように頭を振るばかりです。

最後に平次が逢ったのは、若旦那幾太郎の許嫁で、遠縁に当るといふ、お桃でした。三郎兵衛には恩人筋の娘とかで、三四年前に田舎から引取られ、厭いや応言わさず幾太郎の許嫁と披露して、行儀見習かたがた、十九の厄やくの明けるのを待っている娘でした。大柄みにくでそんなに醜みにくくはありませんが、何となく鄙ひなびて、若旦那の幾太郎が気に染まないといいものも、決して無理ではないような気がします。

「お前の在所はどこだい」

「川越です」

「この家の住心地はどうだ」

「皆んな親切な良い方ばかりですから」

「若旦那の幾太郎も親切か」

お桃の顔はサツと暗くなりました。

「若旦那を怨んでいる者は誰だ」

「お前は、どう思う」

お桃は何とも言いませんが、襟に埋めた頬は、したたか涙に洗われております。

「お前の外に、若旦那を怨んでいる者はないのか」

「ございません」

「御新造を怨んでいる者はあるだろう。あの通り若くて綺麗で、

気性きしやうもの者らしいから」

お桃は黙って頭をふりました。

「お仲は御新造にひどく叱られた事があるだろう」

「え」

「何か粗相そそうでもしたのか」

「いえ」

お桃はまた口を緘つぐみました。が、平次はそれを開けさせる必要

もありません。番頭の佐助から訊くと、お仲は古川柳にある通り『若旦那様』と金釘流で書いた一通を落して、御守殿風のお篠しのにひどく叱なぐられたことが解ったのでした。お篠に取っては『不義きびしははつとお家のきびし厳はつとい法度』だったのです。

四

「親分」

ガラッ八は少し息をきって囁ささやくのでした。

「何だ、幾太郎はやはり女のところところに居るんだろう」

「居ましたよ。そこを、お神楽の清吉の野郎が、バツサリ縛って行ったんだから、腹が立つじゃないませんか」

「お前の手落ちだよ。腰を据^すえて手繰らずに、面喰^すって俺のところなんかへ飛んで来るからいけなかつたんだ」

「だって親分」

「まあ宜いやな、——縛るには縛るわけがあつたんだろう」

平次は調子を変えて、腹が立ってたまらないと言つたガラツ八の不平のハケ口を拵^{こし}らえてやりました。

「あの野郎はあつしの鼻を明かせるつもりですよ。何もわざわざ肥桶臭^{こえた}え村から、神田三河町まで踏^{ふみ}込んで来なくたって宜いじゃ

ありませんか」

「岡っ引に縄張りなんかあるもんか。縛るのは向うの働きだ。——が、こいつは働き過ぎたかも知れないよ。腹ばかり立てずに、清吉が縛ったワケを言いな」

「幾太郎はこの囲いの鍵を持っていたんですよ。——梅吉を引入れて刺し殺し、錠をおろして逃げ出したと読んだ清吉は、癩しゃくにさわるが凶星を射貫きましたよ」

「ま、待ってくれ。——わざわざ錠前をおろしたのは、死骸が逃げ出すとも思ったのかい」

平次の問いはさすがに皮肉でした。

「そんな事は解るものですか」

「で、お艶とかに逢ったのかい」

「逢いましたよ。芳町の芸者だったそうで、凄い女ですよ。この家のお内儀も綺麗だが、お艶と来たらポトポト水が滴れそうで」

「八五郎と来た日にゃ、涎よだれが垂れるじゃないか」

「へッ、冗談でしょう。全く良い女ですぜ、親分。半歳ばかり前に、幾太郎が根引いて、困ったまままだ金蔓かねづるも手も切れていないんだそうで、一生懸命幾太郎を庇かばっていましたよ」

「で、ゆうべ幾太郎は何刻に行ったんだ」

「宵のうちに来て、暁方は帰ったがまた戻って来たというから変

じゃありませんか」

「フーム」

「その上、お艶に駆落をすすめたそうですよ」

「お艶は幾太郎を庇かばいながらそんな事をペラペラ饒舌しゃべるのか」

「へエ——」

「薄情な女だな。それに比べると、物を言わないお桃の方が余つほど実じつがあるぜ」

「——」

「打ち殺してもやりたいほど幾太郎に未練があるんだ」

「すると？」

ガラツ八はゴクリと固唾を吞みました。

「あわてるな、お桃が下手人だとは言わないぜ」

「親分」

「俺の見当じゃ、罠いの中の玉が入れ変つているとも知らずに、幾太郎を殺すつもりで、梅吉を殺したに違えねえと思うんだ」

「じゃ、やはり、幾太郎が下手人じゃないと言うんでしよう」

「幾太郎が下手人だった日にゃ、自分が自分を殺した下手人だつて事になるよ」

「本当ですか、親分」

「幾太郎は梅吉に身代りを頼んで、夜中ちようず手洗てうせんに行く親父の眼を誤ご

魔化^{まか}し、そつと抜け出してお艶に逢いに行つたんだらうよ。今までもちよくちよくそんな事をやっていたに違えねえ」

「へエ——」

「暁方帰つて来て、梅吉と代らうとして、気が付くと、錠がおりている。柱から鍵を外してあけて入つて、梅吉の殺されて居ることに気が付いたんだらう。あんまり吃驚^{びっくり}して、あわてて錠をおろして逃げ出し、もういちどお艶のところへ行つた——？」

平次の空想は飛躍します。

「幾太郎が梅吉を殺す気なら、何も罫の中なんかで殺さなくたって宜いわけだ。自由に罫いから出られるんだからな。——そ

れに鍵を持って居るのは、面喰った証拠にはなるが、梅吉を殺した証拠にはならねえ」

「有難てえ、それで溜飲りゆういんが下るといふものだ」

「待てよ。囲いの戸へ鍵をおろしたのは、幾太郎じゃないかも知れないな。海老錠えびじょうは鍵がなくなつたっておろせるんだ」

平次は深々と考え込みました。恐ろしく簡単に見えていて、この殺しはなかなか奥がありそうです。

五

「八、此方にもいろいろ面白いことがあったんだ。第一にこの黄楊げくしの櫛くしだ」

「それが何うかしましたかえ」

「この櫛はお内儀のお篠しのさんののだが、どんな間拔まひな下手人だつて、梳すき櫛くしを持って殺し場へ行く女はあるまい」

「それをわざわざ捨てて来るのは、大間拔まひけでなきや、恐ろしい知恵者だ」

「――」
ガラツ八は黙って眼を見張りました。親分平次の推理の発展を、

こう見詰めて居るのは、ガラツ八に取っては、たまらない嬉しさ
だったのです。

「だから、お内儀のお篠が、自分とあまり年の違わないままこ継子の幾
太郎を殺すつもりで、間違つて梅吉を殺したとしたら、わざわざ
櫛なんかおいて来る筈はあるまい」

「――」

「昨夜は良い月だったな。八」

「結構な十五夜でしたよ。あつしはそとで『口説くどき』の文句を稽けい
古こしたくらいだから」

「つまらねえ物の稽古をしたものだね。あいつは色気がなさ過ぎ

るよ。——ところで下女のお仲をちよいと呼んでくれ。ここなら人に聴かれる様な事はあるまいから、内緒に一と責め責めて見たい」

「あの女は思いの外口剛くちごわですよ、親分」

ガラッ八は飛んで行くと、少し反抗的なお仲の肘ひじを取って、グイグイ土蔵の裏へつれ込んで来ました。

「お仲、手数をかけるじゃないか。馬鹿な細工を皆んな言ってしまっっちゃ何うだ」

「——」

高飛車に出る平次を、白い眼で見て、ちよつと良い年増のお仲

はツンとするのでした。

「皆んな解っているよ。今朝、隣の納戸の鏡台から、お内儀の櫛を持出して、囲いの中へ投げ込んだのもお前さ。囲い戸へ錠をおろしたのもお前だろう。幾太郎が鍵を持って行った事に気が付いて人殺しの罪を其方へ被^きせるつもりだったんだ。可愛さ余って憎さが百倍というやつだ」

「――」

「おどろくなお仲、梅吉を殺したのもお前だ。さいしょ幾太郎と間違えたんだろう」

梅吉殺し

「違う、違いますよ。人殺しなんか、この私がするものか」

お仲は敢然^{かんぜん}として喰^はつてかかりました。

「主殺しは磔^{はりつけ}刑だ。もう少しでお前は磔刑になるところさ。幸い

殺されたのが梅吉だから、打首^{ごくもん}か獄門^{ごくもん}くらいで済むんだろうよ」

「親分、私じゃない、私は何にも知らない。た、助けて下さい」

お仲は自分の位置の恐ろしさを判然^{はつきり}覚つたものか、急に泣き出しながら、ヘタヘタと大地に崩折^{くずお}れました。

「八、縛^ばつてしまいな」

「へエ、——本当に縛^ばつて構^まいませんか。やい女、神妙^{しんみょう}にせいッ」

「あッ助けて、私じゃない。私は何んにも知らない——」

お仲は必死と争い続けます。

「じゃ皆んな言うか」

「言う、言いますよ。あの女が若旦那を殺したに違いないと思つたから、口惜しくて口惜しくて、櫛くしを投り込んでやった——それだけですよ、親分」

「あの女——というのは御新造のことだろう。お前にはお主しゅじゃないか」

「でも継子くらいは殺し兼ねませんよ。お屋敷摺ずれがしてる上に、ヤットウだって知ってるし」

「呆あきれた女だ。——御新造のことじゃない。お前の太いのに呆あきれているんだよ」

お仲はさめざめと泣きだしました。

「ところで、八」

「へエ——」

「幾太郎が暁方帰って来たと言ったね」

「え、お艶に言わせると、夜が明けてからだだったそうですね」

「お前がここへ来たのは？」

「むっはん卯刻半（七時）そこそこで」

「かた血は凝まって居たかい」

「にかわ膠のように乾きかけていましたよ」

「殺したのは宵だな。——幾太郎が本当に暁方来たのなら、下手

人じゃない。自分が宵に梅吉を殺して出かけたなら、曉方にもういちど帰って、面喰って鍵を持って行く筈はない」

「それは大丈夫で、あの薄情なお艶がペラペラ喋舌しゃべった事ですか」

「薄情な女がいちばん結構な証人になるわけだな」

「お蔭でお神楽の清吉は馬鹿を見ますよ」

ガラツ八は妙なところへ力瘤ちからこぶを入れます。

「つまらねえところで溜飲を下げたって、お前の男があがるわけじゃあるめえ。それより下手人を挙げる工夫をするが宜い」

「まるつきり見当がつかませんよ、親分」

「幾太郎でもなく内儀のお篠でないとすると、あとはお仲と三郎兵衛と、佐助とお栄とお桃だけじゃないか」

「私じゃありませんよ、親分」

お仲は顔を挙げました。

「よしよし余つ程命が惜しいと見えるな。その心持で、人様なんかを無実の罪に落しちやならねえ。櫛くしが俺の手へ入ったから宜いようなものの、でもなきゃ」

平次は苦笑いしました。これがお神楽の清吉の手にでも入っていたら、今頃お篠はどうなっていたか判りません。

「親分、こんどは何をやらかしゃ宜いんで——？」

「夜になるのを待つんだ。——幾太郎が縛られたことは、まだ黙っているが宜い。検屍が済んだ上でまた考えようがあるだろうよ」

平次はまだ高い陽を仰いで、こう言うのでした。

六

「親分、お茶が入りました」

検屍が済んで、妙に長い日を持って余したように、平次と八五郎がウロウロしていると、転婆娘のお栄が奥の方から燃え上るよう

な派手な声を掛けるのでした。

「有難う。——八、一服やろうか」

平次は八五郎を顧みて、かえり気楽な親類の家へ来ているように、奥の一と間に入って行きました。

「親分、何にもないが、まず一服やって下さい」

主人の三郎兵衛は、娘のお栄と、伴の許嫁のお桃にお茶を入れさせたり、結構な菓子を出させたり、ひどく打ち解けた様子で迎えてくれます。

「有難うございます。それじゃ遠慮なくいただきますよ」

平次は渋い茶を呑んで、菓子をつまみながら、相手の出ようを

待つておりました。

「親分、倅が見付かったそうじゃありませんか」

「え、その上、お神楽の清吉が縛ったそうで。あの男はなかなか容捨しませんよ」

平次の調子は妙に人を焦立いらだたせます。

「その事について、親分に聴いて貰いたいことがあるんだが——」

「実は倅が梅吉に身代りを頼んで困いを抜け出すのは昨夜ゆうべに限ったことじゃないそうで、今までもちよいちよいやって居るそうですよ」

「誰がそんな事に気が付いていました」

平次は静かに問い返しました。

「これですよ。黙っているから、何にも知らずにいると思うと、女はやはり気が廻るんだね——」

半分は独り言のように呟つぶやきながら、三郎兵衛の指は、軽くうな垂れたお桃を指すのです。

「お桃さんが知っていたんですね」

「ゆうべも伴が梅吉と相談しているのを、これが、風呂場で聴いたそうですよ。——だから梅吉を殺したのは、伴じゃないということになりやしませんか。伴がわざわざ身替りに頼んだ人間を、

自分が入っている筈の囲いの中で殺す筈はない——」

三郎兵衛はそれが言いたかつたのです。多分、幾太郎が縛られたと聴いて、おどろいて身代りの秘密を打明けたお桃の言葉を聴くと、矢も楯もた^{たて}まらず、平次を呼んだのでしよう。

平次は黙って顔をあげました。まだ言い足りない、聴き足りないもののあるような気がしたのでした。

「親類一統に相談した上とは言いながら、座敷牢の中へ入れられて、逃げ出せば出られるのに、黙って二た月も我慢して居た倅の心持も、少しは考えてやる気になりましたよ。倅は道楽者で、始末の悪い人間には違くないが、その倅の背後^{うしろ}で、糸を引いていた

人間のあることに、私は気が付かなかつたのです」

三郎兵衛の述懐は、次第に父親らしい愚痴ぐちになります。

「で、その糸を引いてるのは誰で？」

「殺された梅吉ですよ。伴をけしかけて私の手文庫から、東叡山とうえいざん

御造営の大事な見積り書を盗み出させ、私と張り合っている深川の材木屋に売らせたのも、今から考えるとどうも梅吉の細工らしい。それから、お艶とかいう女に夢中にさせたのも、私へ食つかからせたのも——」

「それは何うして解つたのです」

「みんなお桃が探ったり聴いたりして、胸一つに畳んでいたのを、

伴が縛られたと聴いてみんな私に話しましたよ。番頭の佐助もその辺のことを薄々は知っていたようで——」

「お桃さんがね」

平次は妙に裏切られたような心持でした。大して聰明そうにも見えない、平凡そのものの娘が、捕物の名人銭形平次の先を潜つて、裏の裏まで物を見窮みきわめていたのです。

だがしかし、このお桃の聰明さの判ったことが、どんな恐ろしい結果になるか、三郎兵衛も、当人のお桃も気が付かなかつたでしょう。平次は緊張した心持で、暮れかかる外を見やりました。

それからほんの半刻、平次も八五郎も、不思議な焦躁しょうそうに、凝じつ

として居られないような心持でした。

店の小僧たち——よく朋輩ほうばいの事を知っているのに聴くと、梅吉は奈良屋ならやの身代を乗っ取るために、伴の幾太郎を勘当させて、娘のお栄を手に入れることに熱中して居た証拠が、次から次へと挙って来ます。

坊っちゃん育ちで人の好い幾太郎は、完全に梅吉の傀儡かいらいになつて、父の激怒に触れたり、座敷牢に入れられたり、そこを脱出して女に逢つたり、それをこの上もなくロマンティックな遊戯ゆうぎと思ひ込んでいたのでしょう。ゆうべ囲いの中にいるのが、幾太郎ではなくて、替玉の梅吉だったと信じて殺したなら、下手人は？—

—そこまで考えると、平次も八五郎も、何んとなくイヤ—な心持になります。替玉の秘密を知っているのは、家中でもお桃の外にはないのです。

十六夜の月は少し遅く、四方がすつかり夜の風情になったのは、あたり亥刻よつ近くなつてからでした。縁側の戸を全部閉めさせて、らんま欄間から入る月の光を頼りに、囲いの中で平次と八五郎は顔を見合せました。眉毛の数まで読めそうです。



©2017 萩 柚月

「親分」

「八」

「こんな事では、人相まで判りますね」

「その上ゆうべは十五夜で宵のうちは昼のように明るい月夜だった」

「それでも親分」

フェミニストの八五郎は、お桃を助けることの方が、下手人を縛るより重要な仕事になっているのでした。

「これ位の明りなら、家の者が梅吉と幾太郎を間違える筈はない

——梅吉と知って殺したのだ」

「親分、そんな意地の悪いことを言っちゃいけませんよ」

「意地が悪いわけじゃない。幾太郎もお仲も、内儀も、三郎兵衛も、お栄も下手人でないと決ると、こいつは厄介なことになるぜ、

八」

平次の声には妙に厳きびしいところがあります。

七

「脇差はいつたい誰のだい」

平次は今頃そんな事を聴くほど、得物を問題にはしていないかつ

たのです。

「納戸の箆筒たんすのですよ。そこに入つて居ることは、誰だつて知つていませア」

「脇差を刺した時、少しは返り血が飛んだらうと思うが、奉公人の着物を見たかい」

「見ましたよ。血の附いたものなんかありやしません」

「お桃は力がありそうだね」

「田舎で育っているから力もあるでしょうよ」

二人は囲いの中から出て、まだこんな事を言い合つております。幾つかの証拠は、真つすぐお桃の方を指しておりますが、あの純

情らしい娘——許嫁の夫を救うために、人一人殺したのではない
かと思われる、聰明な娘を縛る勇気がなかったのです。

「もういちど考えて見ようよ、八」

「何を考えるんで」

「まず第一に三郎兵衛は倅を殺す筈はないな。——内儀のお篠しのさ
んはどうだ」

「年寄の側に居るんですもの、そつと人殺しに起き出すことなん
か出来るものですか」

とガラツ八。

「えらいッ、八。そこまで気が付けば大したものだ」

「褒めちゃいけません」

「ところで、お栄は？」

「あのお転婆娘は、眼で殺す方で、へッ、へッ」

「お前も殺されかけたろう。——その次はお仲だ。あの女は少し
夕チが悪いぞ」

「夕チは悪くたって人なんか殺せやしません。御新造が憎くて、
櫛くしを投り込むのが精いっぱいの悪事ですよ」

「たいそう肩を持つようだが、大丈夫かい、八」

「先刻親分にうんと脅おどかされたら、口惜し涙を流しながらお勝手
へ行ってつまみ食いをしていましたよ。あんな女は人を殺すもの

ですか」

「えらいッ、いよいよ以って八五郎親分は大した眼力だぞ」

「親分、冗談じゃありませんよ」

「それで臭いのが総仕舞か、——あとはお桃一人だ。気の毒だが、
当って見なきやなるまいな。あの取り立ての桃のような、うぶな
娘を見ると、俺は十手をチラ付かせるのが浅ましくなるが、どう
だい八」

「御免蒙ごうむんりますよ、親分。いっこう綺麗じゃないが、あの娘は妙
に気を揉もませますね」

「役目は役目だ。一応引立てて見なきやなるまいな」

二人は立上りました。奥の一と間には、三郎兵衛と四人の女が
一団になって、平次の来るのを待っている筈です。今となつては
そこへ踏込んで、お桃を縛るほかに、恰好の付けようがなくなつ
たのです。

昼のうち検屍に來た係り同心には、幾太郎の無実を細々と説明
した上、『ほんとう真実の下手人は、今晚中に挙げてお目にかけます』と、
八五郎はツイ大きな事を言ってしまったのでした。

「待ちなよ」

「へ——」

「お桃を縛る前に、もう一人調べるのがあつた筈だが」

平次は唐紙へかけたガラツ八の手を止めました。フト探索たんさくに盲もう点てんのあつたことに気が付いたのです。

「もう一人？」

「ウン」

「誰で——」

「忘れてゐるんだよ。あんまり人殺しと縁のないような人間だから。それ、まだ番頭の佐助というものがあるだろう」

「いけませんよ、親分。ありや算盤そろばんの化物で」

「でも人間には相違あるまい」

「人間の干物ひものですよ、六十三だそうで。——あつしも、もう三十

何年経つと、あんなになるかと思うとこの世が情けなくなりますよ」

「いや、あの番頭なら、梅吉の悪事を知っているし、若旦那の幾太郎を手塩にかけて育てている。——それに、お桃が聴いたという、ゆうべの身代りの相談だって、どこかで聴いていたかも知れない」

「でも」

「間違いはないよ、八。お桃は一応下手人のようだが、幾太郎の事をあんなに思い詰めて、一生懸命幾太郎を庇かばおうとしている娘だ、——あの通り賢かしこ過ぎる娘が、幾太郎のいる囲いの中で梅吉を

殺す筈はない」

平次の推理はしだいに不思議な方へ発展して行きます。

「佐助だって同じことでしょう。若旦那に疑いのかかる場所で殺す筈はないじゃありませんか」

ガラツ八の反弁も尤もでした。

「待て、佐助が店から出て、裏の方に行くじゃないか」

「あッ、逃げ出すんじゃないやありませんか、縛ひつてしまいませんか、飛出そうとするガラツ八、平次はその肘ひじを押えました。」

「待て、あんな恰好で逃げ出す人間があるものか、トボトボと地獄へでも行く人の姿じゃないか。あッ上草履うわぞうりを穿はいたきりだ。八」

「親分」

「後の始末をした上で、死ぬ気だったんだ」

「引とめましようか、親分」

佐助の姿は真にトボトポと裏口の闇の中に消えて行くのです。

「——いや、放っておいちゃ悪い。あれを獄門台に載^のせるのは慈悲じゃねえ、八」

「へエ——」

八五郎は飛んで行きました。

平次は自分の胸の前に犇^{ひし}と両掌を組んで、耳をすましております。サツと吹いてくる夜風が、生温かく初夏の匂いを運んで、ど

うにもならない異いな心持にさいなまれます。

「番頭さん」

「番頭さん」

二人ばかり小僧が脅おびえた様に呼び立てながら店から出て来ました。

「番頭さんは裏へ出て行ったよ」

平次は闇の中を指します。

「提灯を持って来るが宜い」

「へエ——」

何にか狩り立てられるような心持で裏へ出ると、月の光の中に、

真つ黒に立ったのは、大きな物置です。八五郎はそれに気が付かずに、お濠ほりの方へ行つた様子です。

黙りこくつて、その開いた戸の中へ提灯を入れた平次。

「あッ、矢張り」

何も彼も手遅れでした。平次の探索が身近く来て、不意にお桃の方へ外れると知るや、忠義な番頭の佐助はそこで首を縊くつて、罪の償つぐないをしてしまったのです。

帳場硯すずりの上においた、哀れ深い遺書を見ると、『近頃になつて

梅吉の悪事を知り、店の支配人としての責任を取るため、わざと
困いの中にいる梅吉を殺した。幾太郎もてあそを弄んでいた悪事を知らせ

るためだった』と書いてあります。算盤そろばんの事しか知らない佐助は、お艶のところにいる筈の幾太郎に疑いがかかるとは気が付かず、もとよりお桃など引合に出るとは思いも寄りません。

多分何も彼も済んで、潔こゝろよく自首して出るつもりなのが、機会をうしなつてこんな事になつたのでしよう。

「大縮尻おおしくじりだよ。でも、これでよかつたのだ」

そう言いながら銭形平次は、忠義な老番頭の死骸の前に両掌を合せました。

×

×

それから幾日か経ちました。

「親分、幾太郎はようやく目が覚めて、お艶と手をきつて、お桃と一緒にになったそうですよ」

早耳の八五郎が、嬉しいニュースを持って来てくれました。

「それで目出度し目出度しさ」

「危いところでしたね、親分」

「お桃を縛った日にゃ、十手捕縄返上しても迫付かなかつたよ」

「のべつに縮尻しくじっている方七親分や清吉は平気でやって居るじゃありませんか。親分は気が弱いんだね」

ガラツ八は妙なところで、平次をけしかけます。

「それで宜いのさ、岡っ引が気が強かつた日にゃ、どんな罪を作

るか解らない。——出来ることなら俺は、佐助も助けたかったよ」
平次はつくづくそう言うのでした。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

梅吉殺し

初出―「オール讀物」昭和十五年三月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷
河出書房 昭和三十一年七
月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>